

マイ・リラックス・タイム

とおかまち
十日町市長(新潟県) 関口芳史
Yoshifumi Sekiguchi



春にはたくさんカメラマンで賑わう「星峠の棚田」の貴重な雪景色

来年70回を迎える「十日町雪まつり」も終わり、名にし負う豪雪地 越後妻有 十日町市にも、少しずつ春の兆しが見え始めてきています。もういくつかの3月の雪のイベントを終えると、当地にも待ちに待った北国の春が到来します。棚田の雪が割れ、ブナが芽吹き、こぶしの花が咲き、ふきのとう、こごみ、木の芽といった山菜が順々に登場し、人々を里山に誘います。木々の精気をもたらって、山の幸を探しながら春を楽しむ。厳しい冬を過ごした雪国の人々に与えられた特権かもしれません。

今から7年前の、平成22年の十日町市 秋期総合防災訓練で、黒いラブラドル・レトリバーに出会いました。その中の一頭が「あんず」の母「ほたる」で、彼女は昨年亡くなりましたが、良く訓練された災害救助犬でした。その時おながが大きかったにもかかわらず、指揮者の指示に的確に反応し、がれきの中の人を捜し当てていました。「ラブラドルは人が大好きな犬種で、後1カ月足らずで子どもが生まれるが、飼いませんか」と勧められ、即決しました。家族には事後報告でしたが、1年半前に柴犬を亡くしてそろそろという機運が高まっていたこともあり、全員

「あんず」の生い立ち

日ごろの心の憂さもすべて山に吸い取ってもらって、私にとっても本当にリラックスできる時間です。里山の散策に加えて、私にはもう一つ大いにリラックスできる時間があります。ペット自慢はどうかと思いましたが、今年、平成30年は成年でもありますので、それに免じて、わが家の「あんず」の話をさせていただきます。



ラブラドル・レトリバーのあんずちゃんと筆者

生まれたとの知らせを受け、家内と当時15歳の息子と駆けつけると、10頭生まれた内に、雌は1頭、それがあんずとの出会いです。生後2カ月で家に連れて来たときは、息子の両手のひらに乗せられて、小指ほどの短い尻尾を思いつき振って挨拶していました。人間も犬も小さいときの教育が肝要と思いますが、私は、あんずに関しても、一番大事なしつけにほとんど参画できませんでした。家族から「仏壇の座布団に漏らしたとか、ゴミ箱に顔を突っ込んでいた」とか耳にはしましたが、その年は、東日本大震災の翌日発生した、長野県北部地震と7月の新潟・福島豪雨で、ほとん

ど防災服で過ごしておりましたからね。

「あんず」の生活

わたしは良いとこ取りばかりで、家族には申し訳ないばかりですが、しかし、家内は、あんずは犬小屋ではなく、家の中で飼うことにしたこともあり、相当頑張っつけてくれたようです。おかげで、25kgの成犬となった今では、過去3代のわが家の犬たちと比べて、格段に分別があるようで、今は一家の一員として、完全に人間のように取り扱われています。(笑)

前の犬たちとの違いはといえば、まずあんずはめつたに吠えません。家具などガリガリ傷つける事もないし、ゴミ箱はもちろん、食卓のものには、誰も見ていなくとも決して手を出すことはありません。

朝は、2階の寝室から降りてきて、居間で朝刊を読んでいる私の相手をしながら、お友達が来れば察知して、外に出せと合図してきます。冬でも雪の中を2頭並走し駆け廻っています。そのあとの散歩は、私の母の担当で、いつものコースを1時間、途中で別のお友達と遊んできます。老人のペースを尊重し、リードを



毎日の朝刊を読む相手をしてくれる愛犬あんず

引っ張ることなく、真横を歩きます。母が健康で足腰もしっかりしているのは、長年のこの習慣のおかげでしょう。

そして、足を洗ってもらって家にと、一日散に朝ご飯。これは唯一私の担当です。ペットフードを一瞬で平らげますが、もし「そこで待て」と言えば、よだれは止めどもなく溢れるでしょうが、多分10分でも待ち続けたと思います。たまに、誰もいない信濃川の河川敷に行って練習をします。「そこで待て」と言っ座らせて、私はどんだん広場を対角線に進みます。100mも離れたところで、「よし」と叫ぶと、まさに飛ぶが如くこちらに向かってくるくれます。ささやかですが、私の至福の瞬間の一つかもしれません。

犬の効用

夕方の散歩は、これは家内の担当です

が、下校する子どもたちが遠くから「あんずちゃんだー」と駆け寄ってきて、あんずを真ん中に子ども達の会話も弾むようです。あるとき1人で下校していた小学生の男の子と出会い、別れ際に「今日は学校でいやなことがあったけど、あんずちゃんに癒やされた」と言われたこともありました。

ここ数年、保健所からの依頼で、あんずは特養施設の慰問に出掛けます。色が黒い大型犬ですから、怖がられないように、歯磨き・シャンプー、可愛い服でおしゃれをして向かいます。施設のホールで大勢の利用者さん1人1人のそばに寄り添い、撫でてもらうって、何をされても喜んでしっぽを大きく振るので、高齢者の皆さんにも大きな笑顔が戻り、職員の皆さんにも喜ばれているようです。

このように、私自身も里山や愛犬に癒やされながら、市長職を続けさせていただいておりますが、この経験を生かし、物言わぬ植物や、動物のセラピー効果を市政に積極的に取り込んで、市民の皆さん、特に子どもたち、おじいちゃん、おばあちゃんが、少しでも幸せを感じてもらえるために、力を尽くす所存です。そしてこの夏は、7回目を迎える「大地の芸術祭」の作品たちを目当てに、越後妻有の里山を、「あんず」と一緒にゆっくりと巡りたいと思います。